

第6回 舞台芸術科（仮称）設置検討協議会
議 事 録

- 1 日 時 平成30年6月18日（月）
午後4時00分～6時00分
- 2 場 所 神奈川県庁 新庁舎5階 新庁応接室
- 3 出席者 能祖 將夫 荒木 正 岡野 親
楫屋 一之 川端 麻穂 久我 肇
近藤 建吾 （敬称略）

1 開会

(事務局)

定刻になりましたので、ただ今から第6回舞台芸術科（仮称）設置検討協議会を始めさせていただきます。

本日、相模原市立大野台中学校の中澤校長と、神奈川芸術劇場の眞野館長は、所用のため欠席されます。中澤校長につきましては、今日の会議の資料を、事前に未定稿でお示しして、御意見をいただいておりますので、後ほど協議の際に御披露できれば、と思います。なお、岡野指導部長は、所用により遅れての参加となります。

本日は第6回ということで、これまで半年間、5回にわたって協議いただきまして、本日が最終回の予定でございますけれども、報告書案について御協議いただければと思っております。

それでは、早速でございますが、これからの議事につきましては、進行を能祖会長にお願いいたします。

2 議事

会長（能祖構成員）

それでは、最終回ということですので、よろしくお願いいたします。

議事に入る前に、「会議公開の可否について」でございます。

本日は、報告書案その他が議題となっておりますが、協議は原則として公開したいと考えております。また、未成熟な情報を含む議論が展開され、非公開とすることが望ましい場合には、非公開とさせていただきたいと思っておりますがよろしいでしょうか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。

それでは、協議を原則として公開して行うことといたします。

まず、本日の主な議題に入る前に、前回までの協議の確認も兼ねて（1）「指導者の確保等について」、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

それでは、本日お配りしております資料のうち、参考資料1、平成30年6月18日版というものについて、お手元に御用意いただければと思います。前回から、指導者の確保等について、たたき台を協議していただきました。そのときにいくつか御意見をいただいた中で、Ⅱ「指導者のあり方について」、1「取りまとめを担当する指導者…学科長などの立場の教員」について、議論していただいた中で、<制度としての

立場>では、専任教員の方をお願いするということになっておりますが、その下の※で、この立場の教員については、プレーイングマネージャーでは厳しいだろうということで、やはり、専任できるような環境を整えることが必要であるということがございましたので、「コーディネーターに徹することができるように環境を整えることが必要」ということで、下線の部分を新たに加えさせていただいております。また、<指導者確保の考え方>の、下の点にございますけれども、この学科長のような立場の教員をしっかり支えていくチームが必要であるという御意見も、そのときに併せていただきましたので、「見識者によるサポートチーム（スタッフ集団）が配置されることが望ましい」ということで、下線部のところを加えさせていただいております。まず、この部分について、御協議いただければと思っております。よろしく申し上げます。

会長（能祖構成員）

ただいまの説明に御質問、御意見はありますか。
荒木さんからございますか。

（荒木構成員）

前回の議論の中でも、この学科長等の立場の教員というところでは、いわゆる準管理職のようなイメージということで思っていたので、それが、この文章でこういう形で表現されているのだらうと思っております。この部分に関しては、こういったように、きちんと報告書にも載せられるとよいと思っておりましたので、ぜひこういった形で進めていただければというふうに思います。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。
楫屋さんはいかがですか。

（楫屋構成員）

よいと思います。

会長（能祖構成員）

久我さんはいかがですか。

（久我構成員）

私もよいと思います。

会長（能祖構成員）

近藤さんはいかがですか。

(近藤構成員)

問題ないと思います。

会長（能祖構成員）

川端さんはいかがですか。

(川端構成員)

見識者によるサポートチームは、実際にはどのような立場で関わることができるのかということ、もう少し明確にできるとよいです。これからなのかもしれませんが。

(事務局)

事務局から補足させていただくと、学校の教員で、その学科を担当する教員も、当然サポートチームに入ってくると思いますし、実際には、専門家の方に関わっていただくことを想定していますから、その専門家の方も、併せてこの学科を支えていくチームとして関わっていただく形になるかと思います。どれくらいの人数、規模なのかということは、報告書をまとめていただいた後に、もう少し具体的に検討させていただきます。

(荒木構成員)

いまの、学科長のような立場の人間ということに関しては、これで構わないのですが、実際に学校で、生徒たちの指導などということ考えたときに、学校の人間の立場として、むしろ、この下の、当該校の教員で舞台芸術科を担当する教員というところで、実際に、授業のほうは、この学科の特性からいって、専門家の方に来ていただいて、いわゆる時間講師のような方として来ていただいて、授業を担当していただくことが多くなるだろうと思う一方で、実際に学校で生徒を指導することを考えると、やはり専任で、担任であったりはもちろんそうですし、三年間の間で何回かは発表会などがあるとすると、その練習であるとか相談であるとかがあるわけで、そういったことを考えると、この学科長以外に、こういった専任で、やはり、そういった、授業を教えながらも、舞台芸術のことも理解していて、そういった相談とか指導に乗れるといった教員が、できれば複数必要なのだろうなと思っていて、ぜひ、その辺も議論をしていただいて、報告書のほうにも加えていただけるとありがたいのかなというふうに思います。

会長（能祖構成員）

いま荒木さんからいただいた御意見というのは、協議の対象にしますか、それとも御意見ということによろしいですか。

(事務局)

この後、報告書の方を説明していきますけれども、報告書の中の「指導者の確保等について」の主な論点で、最初にいくつか挙げているのですが、その中には、いま荒

本構成員からお話ししていただいたようなことは、具体的には入っていません。前回、事務局からたたき台をお示しして、その部分については、その段階で賛同する意見、あるいは反対する意見というのはなかったと思いますので、逆に、積極的にその部分の意見を取り入れた形で、今回まとめるという形にするのであれば、いまのような議論を踏まえて、「舞台芸術科（仮称）を担当する教員」のところに、お話のあった内容も加えてまとめられるとよいかと思います。

会長（能祖構成員）

そうですね。そのときに、もう一度議論するということでよろしいでしょうか。

（賛成の声）

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。それでは、これから進めていく中で、「指導者の確保等について」というところがありますので、そこでもう一度議論させてください。

それでは、本日の主な議題に入ります。（２）「舞台芸術科（仮称）設置検討協議会報告書（案）について」です。これにつきましては、事務局からメールで送付されていると思いますので、お目通しいただけたかと思います。これまでの協議を踏まえて、事務局に取りまとめてもらいましたので、説明をよろしくお願いします。

（事務局）

それでは、本日の本題の、資料1について、御説明させていただきます。

まず、表紙なのですが、**「舞台芸術科（仮称）設置検討協議会報告書」**として、取りまとめていただく形になりますけれども、副題といたしまして、「**県立学校での新たな学科の設置に向けて**」というものを付けてございますので、これを含めて、後ほど御意見をいただければというふうに思います。1枚めくっていただきまして、「はじめに」というところがございますが、こちらは、会長とやり取りをさせていただきながら、このような形になってございます。流れといたしましては、子どもたちを取り巻く環境が大きく変わってきている中で、子どもたちが様々な体験活動を通じて、自分の価値観を認識したり、他者と共同したりすることの重要性を実感できるような機会が、最近はなかなか少なくなっているという状況を記載させていただいた上で、現在、教育委員会では県立高校改革に取り組んでいるということや、国の動きなどを少し書かせていただいて、今回、協議会において学科の設置に向けた検討を、我々からすると依頼させていただいたということになりますが、その中で、後段のところの「もとより」以下の文言になりますけれども、「**演劇を中心とした舞台芸術の学びには、文化芸術への感性を高めるだけでなく、豊かなコミュニケーション能力や表現力を身に付けることができるとともに、他者認識や自己認識の力の向上にもつながるなど、高い教育効果が認められているところ**です。一方で、今日の日本に、舞台芸術に関する教育のスタンダードというものがありません」とした上で、この協議会において、基本コンセプトや、教育内容、施設・設備、指導者の確保などの項目

について議論して、まとめてきたという流れになってございます。最後に、「本報告書を活用して、神奈川の県立高校として初となる、『舞台芸術を広く学ぶ学科』が設置されることを願っています」ということと、「『舞台芸術』を通じて創造性豊かな人材を育成し、この新たな学科で学んだ生徒たちが社会の様々な分野で活躍している姿を見せてくれることを期待しています」というような流れで、記載してございます。

報告書の中身を簡単に説明させていただきます。1枚めくっていただきまして、最初に「目次」がございます。次に、1ページといたしまして、1「舞台芸術科（仮称）設置検討の背景」を記載させていただいております。これは、第1回協議会の中で、最初に私どものほうで御説明させていただいた、県立高校改革での位置づけですとか、いまお話をさせていただいた国の動向、あるいは現在の県立高校における芸術教育に関する専門教育の状況、演劇科というものがないということ、それから、2ページに参りまして、他の都府県の舞台芸術に関する学科の設置状況、そして、後ろに資料も付けてございますが、中学生のニーズについて、一定程度ニーズが把握できているというようなことを、背景として最初に載せさせていただいております。2「舞台芸術科（仮称）設置検討協議会の設置と検討依頼事項」では、「こうしたことから」ということで、県教育委員会では、県立高校改革実施計画のⅡ期計画の中で、演劇など舞台芸術を幅広く学ぶ学科を設置したいと考え、この舞台芸術科の基本構想について検討を依頼するために、本協議会を設置したという流れになってございます。それから、3ページに参りまして、3「本協議会での検討経過」では、これまで、今年の12月から始まりまして、今回の6月18日まで、6回にわたって議論したことを、経過としてまとめてございます。4ページから本題に入りますけれども、最初に、基本コンセプトについて整理をさせていただきます。5ページの四角囲いの中に、以前協議いただいてまとめた基本コンセプトが載ってございますけれども、そこに至るまでの、これまでの主な論点をまとめて、最初に掲載をさせていただいております。まず、（舞台芸術のジャンル）といたしましては、一つ目の丸にございますけれども、現代の演劇を中心とした分野を対象に考えたいということ、また、その際、多様な力を身に付け、多様な進路に対応できることを考慮することが大切であるというような議論をいただきました。それから、（育みたい生徒像）につきましては、専門学科高校であるからには、将来、舞台芸術に関係する道に進みたいという生徒の希望に対応できる高校であることはもちろんですけれども、あくまでも高校教育の場であるということを考えて、この学科は、プロを養成するものではなく、舞台芸術の教育を通じて、人間性、創造性豊かな人間を育成するものとしたいということで、これは、基本コンセプトにまさに直結する部分かと思っております。その後、舞台芸術に関する様々な分野を学ぶ教育を進めていくことが望ましいなどの御意見を載せさせていただいております。（教育内容）にも少し触れていますけれども、古典芸能も視野に入れる必要があるですとか、ダンスにつきましては、演劇とボーダレスになっている面もあるので、ある程度学ぶことができるようにすべきだというような、これまでの議論を、ここに掲載させていただいております。5ページの、（コミュニケーション能力の育成）につきましては、先ほど申し上げたような内容を載せさせていただいているのと、それから、（外部機関との連携）ということで、高校生が大学の学生や大学院生と一緒に学ぶということ

は、教育効果があると思われるので、連携先として、最初は大学が入っていなかったのですけれども、明示するとよいというような議論を、ここに載せてございます。最後に、プロの活動現場を見たり体験したりすることは大変有意義であるということで、これらの論点を踏まえて、「基本コンセプト」を1から7というふうに整理しているという形でまとめさせていただいております。

6ページを御覧ください。5「教育内容について」、8、9ページに以前議論した内容を取りまとめたものを載せてございますけれども、そこに至る経緯ということで、まず、(想定される生徒像)は、先ほどの基本コンセプトにも関わってきますが、演劇に関係してきた生徒やそうでない生徒、それぞれを対象としているというようなことを、ここに載せております。また、(教育内容に対する基本的な考え方)につきましては、スタンダードがないという中で、高校生に対してどういった演劇教育を施していくのか、そういった視点で考えることが必要であるとか、あるいは、学年制、単位制に関わらず、専門学科として必要な教育を施すことが大切であるなどの意見を、ここに載せております。(専門教科・科目)につきましては、まず、①演劇の理論や歴史に関する科目、それから、②演じるための基礎に関する科目、③実際に演じることに係る科目、そして、④公演の企画・制作、舞台技術等に関する科目のまとまりに分けてお示しした中で、このまとまりで網羅できているのではないかという御議論をいただいたところでございます。一つ飛びまして、卒業発表など、成果発表に向けたプロセスを経験して形にしていくことが大切であるというような議論がありまして、それぞれここに反映させております。それから、7ページの二つ目の丸では、科目の配置年次が重要であり、それにより本学科の特色を示すことができるですとか、その二つ下にありますけれども、具体的な科目をどう絞り込んで、どう配置していくか、また、公演をどの程度の頻度で実施していくか、というようなことを考えていくことで、学科としての特色を出していけるのではないかというようなことを載せてございます。先ほども少し触れましたけれど、その下、(古典芸能・伝統文化の考え方)につきましては、所作を伴うものであるため、少しでも学んでいくことは演劇の学習にとって無駄にはならない、あるいは、日本で育ったものとしてのアイデンティティーにもつながっていくというような御意見を、ここに載せさせていただいております。

(ダンスの考え方)につきましては、クラシックバレエがすべてのダンスの基本であるというようなこと、それから、その下には、基礎レッスンの講座では、クラシックバレエの場合、高校までの経験の有無は課題にならないというような御議論をいただきましたので、ここに載せさせていただいているのと、併せて、ダンスにはコンテンポラリーダンスも主要な種類としてあるということで、高校での授業としては、クラシックバレエに限定せず、バレエレッスンという形をとることも考えられるというような、両論をここに載せさせていただいております。それから、(実技における生徒人数)につきましては、おおむね20人が限度であろうというようなことを、ここに載せてございます。それから、(共通教科・科目)については、音楽や美術に固定するのではなく、書道や工芸がございまして、幅広く学べることを望ましいという御意見を反映させてございます。そうした御意見をまとめて載せさせていただいた上で、「教育内容」について、大きく1から3の三つに分けて整理してございます。1「専

門科目の教育内容」につきましては、先ほどお話をさせていただいた内容を、四つにまとめて載せてございます。科目の名前は、まだこれからになりますけれども、例として、併せてここに載せさせていただいております。また、学習成果の発表のこと、伝統芸能のこと、それから、舞踊についてということで、先ほどの御意見を踏まえた整理をさせていただきます。それから、2「共通科目の教育内容」も、先ほどお話しした内容を反映させていただいているのと、3「教育展開での工夫」も、20名から25名程度のグループ形式という形で載せさせていただいております。10 ページを御覧ください。6「施設・設備の整備について」ということですが、主な論点といたしましては、最初に、何より安全に配慮した施設でなくてはならないということ、それから、全体として校内に小規模な発表の場が一つ、稽古する場が二つあることが最低限必要ではないかということがございまして、ここに論点として載せさせていただいております。それから、その二つ下ですが、成果発表の公演までをすべて自校で賄うのではなく、外部機関との連携も視野に入れて考えなければいけないというようなことや、一つ飛んで、既存校舎の改修を前提に考えるならば、防音防振にもしっかり配慮するすとか、また一つ飛びまして10 ページの最後になりますが、生徒たちが個別に活動し、自由な発想ができるような空間として、練習室のような小部屋が2ないし3室必要であろうというような御意見をいただきましたので、論点として載せさせていただいております。11 ページ、(設備関係)ですけれども、発表する場、稽古する場ともに、スクリーンやプロジェクタなど、映像のための装置が必要であろうという御意見を載せてございます。それから、発表の場としての施設の客席について、講義での使用を考えると、ロールバック式は効率的であるという御意見と、生徒の演劇的想像力を高めていくことを考えると、平台や金属製のモジュールなどを組むことが望ましいというような御意見をいただいておりますので、両論を載せさせていただいた上で、次の丸に、実際の学校施設の大きさ等を考慮して、どちらのメリットを優先させるか、あるいは、両立させることが可能かどうか、検討することが必要であるというようなことで、論点として載せさせていただいております。その後、四角で囲わせていただいておりますけれども、以前整理していただいた「整備方針」として、充実した学習指導を行うため、教育課程上必要となる施設・設備を整備することとして、〈検討の前提〉として、(1)から(5)まで載せさせていただいた上で、例として、大スタジオ、レッスン室1・2、個別活動室1～3という形で、まとめてございます。12 ページには、2「授業等の展開と施設との関連イメージ」ということで、先ほど、四つのまとまりがございましたので、そのまとまりごとに、主にこういった形式で、使用場所としてはこういった教室を想定しているのかということ、まとめていただいたものを、そのまま載せさせていただいております。①から④まで、こういった部屋で、こういった設備を使って授業を展開していくのかというイメージをまとめてございます。⑤「その他」につきましては、古典芸能を実施する場合は、レッスン室や大スタジオの併用を想定しているということで、最後に載せさせていただいております。次に、14 ページ、7「指導者の確保等について」でございますが、基本的には、先ほどお話しさせていただいたとおり、(学科の取りまとめを担当する指導者)、(当該校の教員で、舞台芸術科(仮称)を担当する教員)、それから、(舞台芸術に関する科

目を担当する専門家)ということで、三つに分けて御意見をいただきましたので、それらを、(基本的な考え方)を最初に載せた上で、それぞれ意見を載せさせていただいております。その上で、16 ページになりますけれども、「指導者の確保等」についてということで、整理させていただいた内容を掲載してございます。先ほど、下線部を説明させていただいた、「取りまとめを担当する指導者」の〈制度としての立場〉の※と、〈指導者確保の考え方〉の二つ目の点については、既に反映した形で取りまとめさせていただきますので、御協議いただければというふうに思います。18 ページ、8 「その他」でございますけれども、(入学者選抜)、(開設までの準備期間)、それから、(学科名称)などについて、意見をいただいておりますので、それを主な意見として掲載してございます。まず、(入学者選抜)につきましては、現在の入学者選抜方法が、学力検査、面接の他に、特色検査というものを実施しておりますので、その中で、舞台芸術を広く学ぶ学科を受検する生徒に対しては、舞台芸術への興味や関心、それから、表現力、協調性などを見取ることのできる検査を行うことが望ましいというような形で、御意見を載せさせていただいております。また、面接とは別の視点から、グループ討論などを行うことは望ましいといった、少し具体的な内容も含めて、ここに記載いたしました。次に、(開設までの準備期間)でございますが、学科の設置に当たりましては、まず、教育内容を検討して、その結果を踏まえて、必要な施設・設備を検討する、その中で、学科の科目の指導者となる専門家を継続的に確保する必要があることから、学科の開設に当たっては、指導者確保の見通しをしっかりと持って進めていくべきであるということ、初めての学科であることから、そのための準備期間をしっかりと確保することが大切であるといった御意見を載せさせていただいております。それから、(学科名称)につきましては、「舞台芸術科(仮称)」となっておりますが、この名称が適当ではないかという御意見を、取りまとめさせていただきます。それから、18 ページの最後ですけれども、後ほど少し御説明させていただこうと思っておりますが、中澤校長から御意見をいただいておりますので、そのことを御意見として反映させていただいております。(中学校等への周知)ということで、舞台芸術は中学校で教科として教えているものではないので、演劇部のある中学校の方がこの学科での学習に有利になるのではないかというように誤解されかねないということで、新設された場合には、中学校にこの学科の趣旨をしっかりと理解してもらえようようにすることが大切であるという御意見をいただきましたので、ここに反映させていただいております。

(岡野構成員入室)

(事務局)

その後ろに資料がございますが、資料1はこの協議会の設置運営に関する要綱でございます。資料2は構成員名簿となっております。資料3は、もともと県立高校改革を議論する中で、有識者がまとめた報告書でございますが、「県立高校の将来像について(報告)」という報告書の中に、舞台芸術による心豊かな神奈川づくりなど、県が取り組んでいる施策との連関を高校教育の取組に生かすということを期待したい

というような文章がございましたので、そのことを載せてございます。それから、資料4は、私どもが進めております県立高校改革の基本計画の中にも、舞台芸術というものを、あらかじめ、一例として載せてあったというような資料でございます。資料5につきましては、先ほど御説明した、文部科学省の「コミュニケーション教育推進会議」の中で、演劇教育を行うことは、コミュニケーション能力育成の効果が高いというようなことを、取りまとめた内容を載せさせていただいております。1枚めくっていただきまして、資料6は、「第3期教育振興基本計画」について、いま中央教育審議会から答申が出ておりますけれども、この中で、文化芸術分野に秀でた人材の育成が必要であるというところを、載せさせていただいております。次に、資料7でございますが、先ほど少し申し上げました、中学生のアンケート結果でございますが、これは「中学創作劇発表会」でのアンケートですけれども、演劇を学べる学科に進学したいと考えている生徒が、非常に高い数字が出ていて、逆に申し上げれば、今まで演劇を学んできていない生徒の中にやりたいという生徒がいれば、さらにここに希望する生徒として加わってくるのであろうというように、私どもとしては考えております。それから、資料8につきましては、以前にもお示ししている「専門学科の授業展開のイメージ」ということで、基本的な科目数で載せてございますけれども、大スタジオ、レッスン室1、2という中での展開が可能なのかということ、お示した資料でございます。最後に、資料9は、他の都府県における舞台芸術関連学科のカリキュラム一覧でございます。以上、報告書は、本文と資料を含めた形で、まとめていただければというふうに考えております。説明は以上でございます。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。個々のところは、これから順を追ってやっていきますけれども、まず、全体の構成に関しまして、今の御説明に何か質問はありますか。よろしいですか。

それでは、資料1の項目に沿って確認します。まず、本日御欠席の大野台中学校の中澤校長から、事務局で事前に御意見を伺っているとのことですので、それについてお願いします。

（事務局）

中澤校長には、事前に御意見をいただいておりますが、先ほど、中学校への周知のお話はさせていただきましたが、それ以外に、この学科の趣旨について、舞台芸術で身に付けた表現力を、これから社会に出たときに生かせるようにするというのを、学科の趣旨としてしっかり押さえてほしいということがございました。それから、指導者の確保に関しましては、演劇には様々な考え方を持っている方がいらっしゃいますけれども、講師を選定するに当たって、教え方ですとか教える内容が限定されることは避けるべきではないかというようなお話がありました。また、教える専門家のモラル、これは御意見をいただいておりますけれども、やはり大切だというお話があったのと、映像装置について、ステージでも活用できるようにするとよいのではないかというような御意見もいただきました。基本的に、この報告書に記載させていただ

ている内容を踏まえて、賛同していただけるというような形の御意見が中心でした。

それから、眞野館長は、本日、急遽御欠席でございましたので、御意見を伺えてございません。ですので、別途、御意見を伺って、報告書に影響するようなものがあれば、皆様にも御報告させていただいて、修正を加える必要があるのであれば、その修正を加えて、改めて皆様にお示ししたいというふうに考えております。御意見については以上でございます。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。それでは、今の説明も踏まえまして、御意見をいただきたいのですが、このように形でも、まず、「はじめに」について、ここは私の名前になっておりますが、このような形で御一任いただいてよろしいでしょうか。もし御意見があればお伺いさせていただきますが、どうでしょうか。

（川端構成員）

よろしいかと思えます。

会長（能祖構成員）

よろしいですか。それでは、これで進めたいと思います。

それでは、1 ページから始まる1 「舞台芸術科(仮称)設置検討の背景」について、いかがでしょうか。

（川端構成員）

1 ページ目の、「連関」という文言は、こういう言葉があるのかどうか。

会長（能祖構成員）

「関連」の間違いですか。

（事務局）

事務局から補足させていただきます。いまお話があったように、特に、1 「舞台芸術科(仮称)設置検討の背景」のところが多いのですが、参照となる資料があるところについては、資料を付けてございまして、この部分は資料3になりますので、後ろの資料3を御覧いただきますと、外部の方から報告をいただいたもので、最後の下線が引いてあるところに、県が進めている施策事業との「連関」を視野に入れた高校教育の取組みを期待したいということで、報告がまとまってございまして、そのまま引用しているものですから、これを替えるわけにはいかないもので、申し訳ありません。

会長（能祖構成員）

言葉としても使っていますよね。

(岡野構成員)

「連関」という言葉もありますね。

会長（能祖構成員）

では、これはこのままということ。

他にありますか。よろしいですか。

それでは、4ページ目、4「舞台芸術科（仮称）の基本コンセプト」ですけれども、ここはかなり重要なところかと思えますけれども、いかがでしょうか。

(楫屋構成員)

全体的なことに意見はほぼないのですけれど、だから逆に、要望というか、用いる言葉で言うと、後ろの方の、（育みたい生徒像）の三つ目の丸の、「芸術的センスを持った人を育てたい」という、この「センス」という使い方は、少し軽いような気がするのです。センスを育てるといふのはいかがなものかという感じがするので、おそらく、発言の気持ちとしては、芸術的な創造性とか芸術的な思考力とか、もう少し落ち着いた言い方の方がよいと思います。主な論点のところなので、本論的なところではないので、よいと言えばよいのですけれど、全体的な配置バランスから言えば、芸術的センスという言い方は、軽々しくてあまり好きではないです。

会長（能祖構成員）

もしかしたら御意見がわかれるところかもしれませんけれど、いかがでしょうか。

(岡野構成員)

感性とか。

(楫屋構成員)

そういう言葉の方が収まりはつくと思います。創造性とか、もう少し理性的なところで押さえたほうがよいと思います。細かいですけれど、少し気になりました。

会長（能祖構成員）

これを「感性」と置き換えたほうがよいか、そのまま「センス」で構わないかということなのですけれど、どうでしょうか。少し話は変わってしまうのですけれど、この前、本屋で何気なく見ていたら、センスの育て方みたいな本があって、それに惹かれました。センスという表現が、軽いか重いかはわかりませんが、センスは大事だと、最近、改めて思いました。「感性」の方がよろしいですか。

(楫屋構成員)

要するに、一般的な使い方としてはよいのかもしれないけれど、舞台芸術科という、教育機関の志向性を、「センス」と言ってしまうと、特定の方向に引っ張られそうな気がします。

会長（能祖構成員）

では、ここは、それこそセンスの問題かもしれないので、多数決でよいですか。

（楫屋構成員）

それで構いません。

会長（能祖構成員）

「感性」と「センス」と、他に候補はありますか。「芸術的感性を持った人を育てたい」か、「芸術的センスを持った人を育てたい」か。

（久我構成員）

まとめの1のところにも「芸術的センス」と書いてありますから、この言葉をどうするかで、まとめの方にも影響があるということですよ。

会長（能祖構成員）

そうですね。ここも連動します。

（楫屋構成員）

気にしすぎですかね。

会長（能祖構成員）

もし、楫屋さんがこれで構わないということであったら、これで決定します。どうしましょう。

（楫屋構成員）

あまり好きではないですね。芸術的センスを持った人を育てたいとは思わないので。センスはもともと持っているものなので、育てるものではないのです。むしろ、創造性とか、そういう理性的なものだと、叩き上げれば育つでしょうけれど、センスは、育てるものではないと思うのですけれど。

会長（能祖構成員）

感性であれば。

（楫屋構成員）

言葉の問題なので、それはお任せしますが、それこそ個人的にはセンスでは嫌です。

会長（能祖構成員）

では、多数決でよいですか。

(楫屋構成員)

はい。

会長 (能祖構成員)

「芸術的センスを持った人を育てたい」か、「芸術的感性を持った人を育てたい」か。

(久我構成員)

感性というのも、もともと持ったもので、育ったりするものなのではないでしょうか。

会長 (能祖構成員)

そうですね。

(楫屋構成員)

芸術的創造性とかに置き換えると問題がありますか。

(荒木構成員)

まとめの1では、「芸術的センスを身に付けた創造性豊かな人材」とあり、「創造性」はここに出てきているので。

会長 (能祖構成員)

言葉が被^{かぶ}るとのことですね。

感性とは、要するにセンスの翻訳ですよ。

(久我構成員)

ここで使ったセンスというのは、やはり感性に近い意味で使っていたのかと思います。

会長 (能祖構成員)

そうですね。

では、ここであまり時間をかけてもいけないので、多数決で、どちらかに手を挙げていただいてよろしいですか。

このまま、「芸術的センス」で構わないという方は挙手をお願いします。

(能祖構成員、荒木構成員、久我構成員、近藤構成員 挙手)

会長 (能祖構成員)

4名で、多数となりました。

すみません、2ページ、3ページを飛ばしていたので、少し戻ります。2「舞台芸術科(仮称)設置検討協議会の設置と検討依頼事項」というところと、3「本協議会

での検討過程」、これはこのままでよろしいですか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

それでは、4ページに戻ります。先ほど、本日御欠席の中澤先生からの御意見で、学科の趣旨について、舞台芸術科で身に付けた表現力を社会に出たときに生かせるようにするというのは、これは、基本コンセプトに関わるということですか。

(事務局)

おそらく、学科を作って、その趣旨を皆さんに伝えていくときに、そこで学んだ表現力というものを社会にしっかり生かせるようにしておくべきだという御意見だと思います。ですから、この基本コンセプトを変えて、そういうことをここに入れておいた方がよいのではないかというようなことではなかったと思います。

会長（能祖構成員）

いま、行き過ぎという感じもあるのですが、芸術を社会のために生かすという風潮が濃い中で、その是非もあるでしょうけれども、そこに全く触れていないということが少し気になったのですね。身に付けた演劇的な知識、技術、ものの見方を社会に生かすという視点を得るということは、どこかにあってもよいのかなと思ったのですけれど、どうでしょうか。楫屋さんはどう思われますか。

(楫屋構成員)

どこにもなかったですか。

(事務局)

14 ページに7「指導者の確保等について」がございまして、その（基本的な考え方）の二つ目の丸に、「演劇の社会的な広がりということの視点は持つべきである」とあり、要は、演劇的要素を取り入れたような職業の方を取り込むことによって、学科の幅を広げて、社会の中で演劇的要素というものが生かされているということを踏まえて、そういう活躍されている方を指導者に入れて、そういう体験とか経験をお話しいただくことが必要であるということは、ここに書いてはあります。それが基本コンセプトにあるかということ、いまの時点では、そこまでのことではないです。

会長（能祖構成員）

舞台芸術を学ぶことで、自身の成長はもちろんのことながら、学んだことを社会で生かすという視点を得るといったことは、あってもよいのかなと思ったのですけれど。

(楫屋構成員)

いま言われた14ページのところの、演劇の社会的な視点というものが必要だという

ことは、確かに言った覚えがあるのですが、その前段で、言われるとおり、学科を作るときに、特に、ここに入ってくる生徒の意識として持っているというようなことは、確かに書かれていないですね。

会長（能祖構成員）

だから、（育みたい生徒像）に、先ほど議論になった、「演劇的な視野でものをみることのできる、芸術的センスを持った人を育てたい」のあとに続けるか、だと思っただけですけれど。

（岡野構成員）

ずばりではないのですが、4ページの（育みたい生徒像）の一つ目の丸の最後に、「プロを養成するのではなく」という前提の中で、そういう教育を通じて「人間性、創造性豊かな人間を育成する」とあって、それから、三つ目の丸に、前段に何も修飾語がなく、単独で、「演劇的な視野でものをみることのできる」とありますので、これは、社会に出たときに、色々な場面で、そういう視点でものをみることができるようセンスを持った人を育てたいという意味だと解釈していました。もし、もう少し明確に書くのであれば、ここを少し膨らませて書くのがよいのかなと思います。

会長（能祖構成員）

あまり社会の役に立つということを強調するのも嫌なのですが、ただ、やはり、そこを落とすわけにはいかないのかなと思っていますが、どうでしょう。

（岡野構成員）

あとは、社会につながる要素というと、5ページの（コミュニケーション能力の育成）の後段に、「グローバル社会を見据えた、自己表現を通じたコミュニケーション能力の育成」というところにも、この演劇教育を通じて社会につながる能力を育てることが、一応書いてあります。

（久我構成員）

資料6に国の第3期教育振興基本計画がありますが、そこに書いてある「文化芸術分野に秀でた人材の育成」の、もともとの大きな項目としては、「社会の持続的な発展を牽引するための多様な力を育成する」という中に書かれています。この一つ目の丸で、「各自が基礎・基本を身につけた上で、それぞれの得意な分野や個性に応じて社会の様々な場面においてリーダーシップを発揮して活躍し、新たな価値を創造して社会の持続的な発展を牽引していくことができるよう」というような趣旨で、今後、芸術分野というもののリーダーを育てていくことが大切ですよというように書かれていて、そういった側面を持った中で育てていくという考え方はありますので、社会の発展を牽引していくというような言葉とか、社会に貢献していくという言葉を入れるというのは、馴染むのではないかと思います。

会長（能祖構成員）

そうしたら、先ほどせっかく多数決を取ったのですけれど、（育みたい生徒像）の三つ目の丸を、例えば、「演劇的な視野でものをみることができ、演劇で社会を活性化させるといふ発想と視点を持った人を育てたい」とするのはどうでしょうか。

（川端構成員）

一つ目の丸の下から2行目の最後に、「舞台芸術の教育を通じて」の後ろに入れてもよいかと思ひます。社会で活躍するとか、牽引するとか、そういう人間性、創造性豊かな人間を育成するとか。三つ目の丸だと、クローズアップされてしまう気がするのです。

会長（能祖構成員）

一つ目の丸の趣旨は、プロを養成するだけではなくて、人間教育であるということをは言っているのですよね。ここにどのように入れますか。

（川端構成員）

舞台芸術の教育を通じて、社会を牽引するとか、社会で活躍するといふ一言を入れることによつて、まとまる気がするのですが。

会長（能祖構成員）

「この学科では、プロを養成するのではなく、舞台芸術の教育を通じて、社会に貢献し、人間性、創造性豊かな人間を育成する」などですか。「社会に貢献」といふ言葉は、「社会を活性化する」といふ方がよいと思ひますが。つまり、淀んでしまったような社会を、舞台芸術の力で生き生きさせるみたいなイメージの方がよいのかなと思ひます。

（楫屋構成員）

ここで「創造性豊かな」と言っているのです、そういう言い方をすれば、「社会性豊かな」といふことでもよいですね。ただ、社会貢献といふ言葉はあまり書きたくないですね。ここに入れることには賛成で、つまり、人間性、創造性豊かで、社会的な人間を育成したいとすればよいので、そこをどう書くか。

（岡野構成員）

第3期教育振興基本計画の言葉として、リーダーシップとか、社会を牽引するといふ言葉がありますから、それも社会の貢献につながりますので。

（楫屋構成員）

「人間性、創造性豊かで、社会を牽引するような人間を育成する」とか。

(久我構成員)

あるいは、並列にしてしまうか。「人間性、創造性、社会性豊かな人間を育成する」とか。

(楫屋構成員)

よいですね。逆に、三つ目の丸をせっかく残したのだから、これは、「芸術的センス」を生かしたものだから、ここは芸術的なものとして置いておきましょう。

会長（能祖構成員）

社会性が豊かということと、舞台芸術の力で社会を活性化するという事は、別ものだと思います。人間として社会性が豊かであるかということではなくて、学んだ舞台芸術を、自分が役者になりたいとか、表現者になりたいということではなく、それはそれとして、そのことを社会に役立てるような人間になる、単純に言うと、ワークショップができるとか、市民参加企画をプランニングできるとか、つまり、流行りの言葉で言えば「社会包括」ですが、これは高校で学んだからといって、すぐにできるわけではないですけど、少なくとも、芸術が社会の役に立つという視点を持っておくということは。

(岡野構成員)

社会の役に立つというのと、社会に貢献するというのは、ほぼ同義ですよ。

会長（能祖構成員）

ただ、ニュアンスとして、社会に貢献するというと、いまの社会を肯定している感じがしていて、否定はしないのですけれど、要するに、この社会は完全な社会ではないわけで、演劇に限りませんが、舞台芸術の力の中には、やはり、何かを壊して新しいものを作っていくという力もありますから。

(岡野構成員)

そうすると、第3期教育振興基本計画の言葉は、かなり精選された言葉ですよ。「社会の様々な場面においてリーダーシップを発揮して活躍し、新たな価値を創造して社会の持続的な発展を牽引していくことができるよう」と書いてありますから、いまの社会でもリーダーシップを発揮して、さらに新たな価値を創造して、これからの社会の持続的な発展も牽引していくことができるという、現在と将来の社会に役立っていける、しかも先頭に立って、というふうに書いてありますので、この辺りの言葉を持ってきて書くと、先生がおっしゃっているような部分が出てくるのかなと思います。

会長（能祖構成員）

どうしましょう。

(事務局)

もしよろしければ、学んだことをこれからの社会に生かしていけるようにという趣旨が伝わるように、少し文言を入れさせていただいて、近々に皆様にお見せします。

会長（能祖構成員）

そうしたら、事務局に一度お預けするということでよろしいでしょうか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。

「基本コンセプト」の部分で、他にありますか。

(事務局)

いまのお話で、もし（育みたい生徒像）にそのことを入れたときに、5ページの「基本コンセプト」の7項目を変えるかどうかというところはいかがですか。

会長（能祖構成員）

皆さんどうでしょうか。1か2に反映されていくということでしょうか。

(楫屋構成員)

一般的に言うと、自己があって他者があって、その先に社会があるという理解があって、そういう意味では、2①の「他者を認識し」の先に、社会という言葉。

(岡野構成員)

ただ、2は、色々書いてありますけれど、要はコミュニケーション能力の育成をしたいということで、コミュニケーション能力に絞られた形ですよ。

会長（能祖構成員）

そうすると、やはり、1に追加するということですか。

(楫屋構成員)

そうであれば、先ほどの久我さんのお話のとおり、「創造性」の後に「社会性」と入れるか。

会長（能祖構成員）

どういう言葉になるかわかりませんが、この後に、何かつながっていくということでしょうか。

2001年に文化芸術振興基本法ができて、昨年、文化芸術基本法に改正されましたけれど、そういう流れの中での、新しい高校ですから、法律で、芸術の力を社会に生か

すということは大々的に謳^{うた}われているわけですから、そこは酌んでおいた方がよいのかなと思います。

(事務局)

では、それも併せて、お示しします。

会長（能祖構成員）

はい。ありがとうございます。

それでは、5「教育内容について」ですが、私から一つだけ、先によろしいですか。（専門教科・科目）の最初の丸の、④「公演の企画・制作、舞台技術等に関する科目」のところなのですが、脚本、演出というものがクローズアップされていないということに気付いて、脚本を書いたり、演出ができる人間というのも、大きい視野の中に入れておいた方がよいと思いました。①が理論、②、③が役者で、④がそれ以外のスタッフ系なのですが、脚本、演出もメインスタッフなので、「公演の脚本、演出、企画・制作、舞台技術等」というふうにしてもよいのかなと思ったのですが、どうでしょうか。

(楫屋構成員)

そう言われてみると、②と③は、「演じる」というふうな言い方をしているのですね。これはこれでよいのですね。

会長（能祖構成員）

②と③は役者なのですよ。実際にこの高校に入る生徒のほとんどは役者を目指すのはわかっているのですが、ただ、脚本家、演出家の才能は育てられるものなら育てたいです。

(楫屋構成員)

単純に、④の中に入れてしまうという意味ですね。

会長（能祖構成員）

はい。「公演の脚本、演出、企画・制作、舞台技術等」というふうにしたらどうかなと思ったのですが、よろしいですか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

順番も「脚本、演出、企画・制作、舞台技術等」でよろしいですか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

では、そうさせていただきます。これは、他のところともリンクしていて、その都度申し上げますけれども、ここが変わることによって、他とも干渉してくるところがあります。この前の5ページの、まとめの四角の中の3にも、「脚本、演出」を入れたほうがよいのではないかと思ったのですが、どうでしょうか。

（楫屋構成員）

劇作ですか。脚本ですか。

会長（能祖構成員）

脚本だと思ったのですが、劇作の方がよいですか。

（楫屋構成員）

どちらでもよいですけれども、並びは統一したほうがよいですね。

会長（能祖構成員）

順番は統一したほうがよいと思います。そうすると、先ほどのところで言うと、「演技、脚本、演出、企画・制作、舞台技術等」になるのですけれども、それでよろしいですか。

（川端構成員）

「脚本」の後ろは読点ですか。中黒ですか。

会長（能祖構成員）

「企画・制作」と同じですか。

（楫屋構成員）

中黒でないほうがよいです。

（川端構成員）

項目としてどうなのかなと。

会長（能祖構成員）

おっしゃるとおりですね。読点です。企画と制作も、違うと言えば違いますが。

（楫屋構成員）

ここはこれでよいと思います。あるいは、「企画」を入れなくてもよいかもしれませんが。「制作」だけの方がよいかもしれません。企画というのはおかしいので、「制作」でよいですね。

会長（能祖構成員）

「企画」はいらないですか。

（楫屋構成員）

「企画」は、もっと細分化しているというか、企画と制作は別物ですが、そういうふうに分けていくと、もっとあるように思います。「制作」でよいと思います。

会長（能祖構成員）

わかりました。

では、6ページに戻ります。「教育内容」について、何か御意見がありますか。

（川端構成員）

（想定される生徒像）の二つ目の丸ですが、「演劇経験の乏しい」という言葉が少し引っかかったので、「演劇経験の少ない」などの方がよいと思います。

会長（能祖構成員）

なるほど。「演劇経験の少ない生徒にも」と。

（荒木構成員）

あと、この6ページの中にも、いまの「企画・制作」が何か所か出てくるので、もし変えるのであれば。

会長（能祖構成員）

ここも全部ですね。連動して、8ページの1（1）も、「演技、脚本、演出、制作、舞台技術等」になります。

よろしければ、次に進みます。では、10ページの6「施設・設備の整備について」ですけれど、先にか所、12ページの最後から4行目の「簡易舞台」という言い方が気になっていて、簡易舞台というと、本当に簡易なものになってしまうような気がします。ただ、あらかじめ舞台がある形ではなくて、フラットな空間ということも想定して。

（楫屋構成員）

「仮設」ですか。

会長（能祖構成員）

「仮設舞台」ですか。

（近藤構成員）

そのほうが適切かと思います。

会長（能祖構成員）

では、「仮設舞台」にしましょう。
他はどうでしょうか。

（荒木構成員）

12 ページの一番上のところに、「施設・設備の整備イメージ」というものがあって、ここは、専門家の立場からの貴重な御意見をいただいて、なるほどと思えるところではあるのですが、その一方で、この前の 10 ページのところの、（施設関係）の五つ目の丸にあるように、どの学校に作るかによって、整備できる内容というのは本当に変わってくるのかなと思いますので、10 ページにはそういった文章がありながら、まとめの方にはそれが生きていないのかなという気がして、少し気になっているのですけれども。

会長（能祖構成員）

具体的にはどうすればよいですか。

（荒木構成員）

イメージがあるわけではないのですけれど、いまある学校のことを考えると、大スタジオほどではなくても、学校によっては、総合学科などだと、ある程度発表のできるような設備があったりとか、音響があったりとか、プレゼンができるような部屋を持っていたりとか、あるいは、一部の学校にはホールがあるところもあったりするので、その場合には、これと同じような機能があればよいということだと思っているので、その辺が、10 ページのところの意味なのかとと思っているので。

会長（能祖構成員）

想定される学校があれば、そこに最適化した設備を考える、だから、一から作るのではなくて、既存のものを利用して、それにプラスしていくということですよ。プラスして、このイメージに近づけるということですよ。

（荒木構成員）

そうですね。

会長（能祖構成員）

わかりませんが、おそらく新しく作るということにはならないのではないかと思います。だから、いまあるものをさらに良くしていくということだと思っております。

（荒木構成員）

授業内容とも関わる話なので、そういった授業内容が担保できるような、こういったイメージと合う施設・設備を整備することなのですよ。

(事務局)

事務局から補足させていただくと、いま荒木校長がお話しされたのは、この(参考)の「施設・設備の整備のイメージ」が、かなり具体的に書いてあるので、ここを見ると、こう整備しなければできなくなってしまうというイメージがあるのであれば、逆に、ここに何か注釈を入れて、当然これが望ましいのだけれど、既存の学校をこれに近づけるようにしていくなど、要は、何かワンクッションを書いた方がよいという意味でおっしゃったのだと思います。

(荒木構成員)

はい。

会長(能祖構成員)

どうでしょう。川端さんはいかがですか。

(川端構成員)

参考で、さらにイメージなので、かなり気を使って書かれているのではないかというふうには思われますが、いかがでしょうか。ただ、実際には、この大スタジオというのが、ホールに当たる可能性があるとする、それも一つと考えられるので、大丈夫かとは思いますが。

(荒木構成員)

たしかに「整備イメージ」と書かれているので。

会長(能祖構成員)

でも、本当にこういうイメージに近づけてもらえるとよいと思います。

(荒木構成員)

こういうものを一から作っていただけるに越したことはないと思います。

会長(能祖構成員)

「施設・設備の整備」について、他にどうですか。よろしいですか。

では、先に進みます。7「指導者の確保等について」です。ここも重要なところで、先ほど、荒木さんからお話がありましたけれど、反映させるとしたら、具体的にはどこをどうすればよいですか。人数の問題ですか。

(荒木構成員)

複数の方がよいだろうということと、前回、学科長のような立場の方の議論はかなりされたのですが、ここの議論はあまりなかったので、少し心配というか。

(事務局)

事務局から補足させていただくと、14 ページの一番下の（当該校の教員で、舞台芸術科（仮称）を担当する教員）の中の丸が、いまは一つでございまして、これまでに御意見をいただいている中では、確かに少し薄い部分はございますので、先ほど、荒木校長からお話があったような、この学科を支える教員、いわゆる学科長以外の教員、その重要性というところを、御意見として、もう一つくらい丸を加えてもよいのかなということかと思えます。

会長（能祖構成員）

どういう文言がよろしいでしょう。

(事務局)

16 ページの四角囲いの中の、2（2）「当該校の教員で、舞台芸術科（仮称）を担当する教員」の下のところですが、ここにいくつか整理させていただいてまして、14 ページの一番下の丸とつながる部分というのは、16 ページの一番下の点のところ、意見がそのまま反映されているという形になっています。逆に、16 ページのそれ以外の点、例えば、「専門家と協力するなどして、教材を開発する」ですとか、「ティーム・ティーチングを実施する」、あるいは「協力して指導計画を作成したり」など、先ほど、複数人というお話もありましたので、その辺りの御意見が、14 ページの方にも主な論点としてあると、16 ページのまとまりにもつながってくるのかなと思えます。

(楯屋構成員)

冒頭で御説明があった、＜指導者確保の考え方＞のところの書き方の問題なのですが、いま、二つ目の点で、「見識者によるサポートチーム（スタッフ集団）」というふうに書いてあるのですが、この場合、見識者というのは、見方によれば、社外役員とか、あるいは、劇場等と言えば外部評価員とか、立場が外の人で、^{なんら}何等かのジャッジをするときに出てきたりとか、サポートするときに専門的な視点を入れたりするということですが、そうではないほうがよいと思います。つまり、ここで「見識者」と書いてあるけれども、実働部隊として現場で教職員と一緒に働くような専門性の高い人がサポートチームを組んで、現場で学科長などを支えていくというイメージのほうがよいと思います。全く外部からの評価だとかサポートを必要としないという、それは問題があるかもしれないけれど、極力それは減らしてよいと思います。だから、あくまで、見識者ではなくて、実働部隊が専門チームとして学科長を支えるようなサポートチームを構成するというふうに書いておいた方がよいような気がします。見識者というと、どうも外部から意見を言う人というイメージが膨らんでいってしまって、そちらに頼ってしまうので、いま、企業もそうだけれど、流れとしては、外部の顧問とか役員とかを減らしていって、現場で自分たちでやっという傾向にある気がしていて、ここではそのほうがよいと思っています。「見識者によるサポートチーム」といってしまうと、少し外からものを申す人たちをイメージしてしま

う感じがするのですね。むしろ、学科長を支えるのは、専門的な実働部隊で構成する方がよいような気がします。

会長（能祖構成員）

この「見識者によるサポートチーム」というのは、14 ページの5行目、「議論に当たって、学科を取りまとめる者、当該校で舞台芸術科（仮称）を担当する教員、舞台芸術に関する科目を担当する専門家」とあるのにプラスして、「見識者によるサポートチーム」という意味合いですよ。

（楫屋構成員）

ここが引がかかると言えば引がかかるとはたして、その「見識者によるサポートチーム」が、ここで出てきてよいのかなど。取りまとめる者、担当する教員、専門家というところで、まず、現場で作るということを書いておいた方がよい気がするのです。

会長（能祖構成員）

シンプルに言えば、この「見識者によるサポートチーム（スタッフ集団）が配置されることが望ましい」という文言を入れるか入れないかということですよ。入れなければ、それはないということですからね。

（楫屋構成員）

そういうチェック機関というのは、サポートチームという形で配置される必要があるのかどうかという気がします。

会長（能祖構成員）

難しいところですね。

（久我構成員）

前回の議論だと、学科長一人というのはなかなか大変だから、やはり、専門家のような人たち、あるいは教員集団が、学科長を支えるというようなチーム体制というものが必要でしょうということで、まとめたということですよ。

（楫屋構成員）

それは、教員集団の方がよいと思います。外部の人が、ここだけで支えるというのは、構造としてはあまり良くないですね。

（久我構成員）

科目を担当する専門家の方も、外部から特別免許状などでお招きするのですけれど、そういう方がこのサポートチームに入っているということは、あまり望ましくないということですか。

会長（能祖構成員）

楫屋さんがおっしゃっているのは、中でサポートする、その場合サポートという言い方は変ですが、中の人間で責任を持ってやった方がよいのではないかということですよ。

（楫屋構成員）

そうです。どこかの段階でチェックする外部機関があってもよいけれど、それを「サポートチーム」というふうに言うのは、あまりよいとは思いません。まずは現場で作らしようと、現場で学科長を盛り上げていきましょうというようなことが、きちんと見えていて、ある段階でそれをジャッジするのは、それは評価ですから、評価とサポートは違います。

会長（能祖構成員）

どうでしょう。もちろん、中の人で責任を持ってやるのですけれども、そうとはいえ。

（岡野構成員）

いま、学科の取りまとめを担当する人というのは、教員をイメージしていますか。

会長（能祖構成員）

しています。

（岡野構成員）

だから、やはり、日々のカリキュラム的なところ、日常的な業務部分で、要はブレーンのような人たちがほしいのではないかという発想ですよ。

会長（能祖構成員）

そうですね。だから、それをブレーンと取るかチェック機関と取るかによって、ずいぶんイメージが変わるのです。チェックというよりは相談役ですよ。困ったときに相談できるチームがあるとよいということだと思えるのですけれども。現場の先生に聞いた方がよろしいかと思いますが、荒木さんはいかがですか。

（荒木構成員）

もし、学科長という立場で考えたとする、そういうふうには相談できる方というのは、いていただけるとありがたいかなと思います。そうすると、「見識者」という言葉があると、何となくチェック機関のようになるのだとする、「見識者」という言葉にはこだわりはないので、「専門的な立場から」ですとか、そういった形であれば。自分がその学校の中において、そういう立場だとしたら、やはり、外部の方とか、皆さんのような、相談できる方がいてくださると、心強くだらうなという気持ちはあります。

会長（能祖構成員）

川端さんはいかがですか。

（川端構成員）

最初に、どういう立場の方ですかと質問させていただいたときに、事務局の回答が、教員プラス専門家ということでしたので、学科長が教員の立場の者、そして、それを支える専門的な知識を持った方という解釈をしました。チェック機能ではなく、同じ立場で支えるというものだと受け取りました。

会長（能祖構成員）

これがチェック機関に見えてしまうのは、「見識者」という言葉の問題ですか。

（楫屋構成員）

そうですね。「専門家」という言い方と「見識者」は違います。それから、（スタッフ集団）と入っているのも少し違和感があります。

会長（能祖構成員）

そうしたら、（スタッフ集団）も外して、「舞台芸術の専門家によるサポートチームが配置されることが望ましい」ということではどうですか。

（楫屋構成員）

私も発言した側の一人ですが、「サポートチーム」というのが、何か違和感があるのですね。学科長がいて、サポートチームとなると、何か少し違和感があって、今後それが膨らんでくる気がするのですね。

（荒木構成員）

前回、楫屋さんがおっしゃっていたのが、14 ページの下から二つ目の丸で、「学科の取りまとめを担当する人をアシストする見識者によるサポートチームを作る必要がある」という文章になってしまったので、それが、まとめのところでも、そういった形になってしまっているのかと。改めるのであれば、この辺りも改めて、本来の我々が思っている形に近づければよいのかと思いますけれど。

（久我構成員）

専門的立場からアドバイスする人が必要ということですよ。

会長（能祖構成員）

そういうことですね。

（久我構成員）

学科の取りまとめを担当する人を、舞台芸術の専門的な立場からアドバイスする人材を確保しておく必要があるとか。

(近藤構成員)

わかりやすいですね。

(楫屋構成員)

そのとおりですね。だから、サポートチームではなくてサポート体制なのですね。

(岡野構成員)

チームというとな複数になりますから。体制であれば、それこそ一人でも。

会長（能祖構成員）

では、学科の取りまとめを担当する人を、「舞台芸術の専門的な立場からアドバイスする体制を作る必要がある」というようにさせていただきます。そうすると、16 ページにも、それと同じような文言が入るということですね。

それでは、荒木さんがおっしゃっていた、14 ページの「当該校の教員で、舞台芸術科（仮称）を担当する教員」の二つ目の丸は、どのようにしましょう。まずは、人数の問題とおっしゃいましたか。

(荒木構成員)

人数も複数いた方がよいだろうということです。

会長（能祖構成員）

もし人数のことであれば、当該校で舞台芸術科を担当する教員は十分な人数を確保するとか、そういう文言になるかと思うのですけれど。

(荒木構成員)

やはり、教育職の立場として芸術家の人たちに積極的に関わっていけるような教員ということで、例えば、担任というような役割もそうですし、あとは、発表などの機会があれば、生徒たちは事前の練習とか打合せとかをかなりやっていくので、アドバイスできたり相談できたりというような方がいれば。教科は何でもよいのですけれど、部活の指導者などでそういった力をお持ちの方は、たぶん県内にも複数いらっしゃると思うので、具体的なイメージとしては、そういった方がここに入ってくるとよいなというところですね。

会長（能祖構成員）

そうすると、質、量ともに十分な人材を確保するといったことですか。川端さんいかがですか。

(川端構成員)

例えば、「直接舞台芸術に関する科目を担当しない場合でも」というところは、かなり引っかかると言いますか、人材を確保する中で、結局、専任教諭が複数必要で、

やはり一人の人が受け持つことはできませんので、人材確保についてあいまいな部分が多いというのが、もし当該校の校長であったとしたら、おそらく、どういうふうに関わってくるのかというところが不安にはなります。主な論点で丸は一つで、整理したことでは増えているのですが、こういう意見が出たということをもとめたということだと思います。

会長（能祖構成員）

あえて足さなくてもよいのではないかということですか。

（川端構成員）

そうですね。＜制度としての立場＞は専任教員ということで。

会長（能祖構成員）

先ほど、荒木さんの方から、例えば担任とおっしゃっていましたが、担任ということ言えば、1クラス3学年で、3人は必要ということですよ。

（川端構成員）

はい。一定程度理解のある方でないと難しいと思われまして、さらに、調整役まで入っていきますと、本当にすごい方でないと。学年制か単位制かわかりませんが、まとまりにおいて複数配置が必要になってくるとなると、それだけの人材確保というのはなかなか難しいのかなとは思っています。

会長（能祖構成員）

そうしたら、そのように書きますか。「人材確保の困難が予想される」とか。

（川端構成員）

それは何とも言えないところで。

会長（能祖構成員）

「人材確保は重要な課題である」とか。

（川端構成員）

そうですね。あるいは「必要である」というところにまとまるのかと思います。現実的には、不安は残りますけれども。

会長（能祖構成員）

荒木さんもそこが不安だからあえておっしゃっているのですよね。

（荒木構成員）

そうですね。16 ページのところでも、どちらかという、教材とかティーム・ティ

ーチングに関しては書かれているのですが、実際に生徒と関わるという部分の記載が少ないのかなという気もしているのです。

会長（能祖構成員）

たしかに、16 ページのところは、「一定の理解を持っている」とか「協力するなどして」とか、少し引いている感じがありますね。むしろ、メインというか、メインかどうかは別としても。

（荒木構成員）

たぶん、実際には、この教員がその学科の中心になっていくと思うので、そういったニュアンスがぜひ出せないものかということですね。

会長（能祖構成員）

たしかに、これは、ニュアンスとして外頼みになりすぎているかもしれません。匙加減を、この当該校の教員の方に盛る感じで、事務局に文案を考えていただくというところでいかがですか。

（事務局）

人材の配置が、しっかりしたものが必要だというニュアンスだと思いますので、それを14 ページと16 ページのところに入れればよろしいですか。

会長（能祖構成員）

はい。先へ進んでもよろしいですか。人ありきというか、かなり重要な部分だと思いますので、また振り返ってさらに御意見があれば伺います。

それでは、18 ページの8「その他」のところに進みます。（入学者選抜）、（開設までの準備期間）、（学科名称）などです。それと、（中学校等への周知）というものが加わりました。いかがでしょうか。

（楫屋構成員）

最後のところは、非常に重要なポイントだと思います。ここの書き方が、ここまででよいのか、もう少し具体的にどうするかということを、説明会をすとか、特別に何かやるとか、そういうことを踏み込んで書いておくか。趣旨等を良く理解してもらうことは大切であるというような、少し突き放したような言い方のままでよいのか、説明会等を開催して理解してもらうとか、そういうところまで書いておくか。

（久我構成員）

この報告書の中身が決まって、これを基にして、「県立高校改革実施計画（Ⅱ期）」を定めたときに、その計画の説明というのはもちろんします。それから、個別に学校が決まれば、学校ごとに中学校の進路指導の担当者に対して説明もしますし、一定規模集めて御説明するということは、いままで一般的に行われておりますので、こうい

う形で大丈夫かと思います。

(楫屋構成員)

では、ここでは必要ないですね。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。

それでは、資料を御覧ください。これは今まで使ってきた資料ですね。

(久我構成員)

細かい話ですけど、それぞれの資料のところに、例えば資料3とか4に、日付が入っていなかったりするので、これがいつのものなのかわかるように、日付を入れておいた方がよいかと思います。

会長（能祖構成員）

そうですね。

それでは、もう一回振り返って、何かあればおっしゃってください。

一点だけよろしいですか。4ページ、5ページの「基本コンセプト」の辺りの、「企画」のところなのですが、楫屋さんのおっしゃっている制作の中には企画が入っているという感じですか。

(楫屋構成員)

入っています。

会長（能祖構成員）

なるほど。私は、企画と制作は別だと思っていて、もちろん両方やる人もいるのですが、やはり企画は企画者、制作は制作者なので、「企画」という言葉を取るのには寂しいと思ったのですが、どうですか。

(楫屋構成員)

つまり、「演出」という言葉に対応した「制作」です。だから、企画をする人もある意味含まれています。ただ、役割分担の問題なので、削るか削らないかは、増やすか増やさないかということと同じなので。例として、「舞台監督」と「舞台技術」が挙げられているのであれば、「舞台照明」とかも挙げられるでしょうし。

会長（能祖構成員）

それは「舞台技術」の中に入っていますよね。

(楫屋構成員)

「企画」を独立させるのは、あまりピンとこないですね。「制作」でよいような気

がします。舞台制作という言い方は一般的だけれど、舞台企画という言い方はあまり一般的ではない気がします。

会長（能祖構成員）

近藤さんはいかがですか。

（近藤構成員）

考え方なので、我々の部署の中にも企画開発室というところがあったりして、そこは新しい企画を考え、立案していくところなのですけれど、ここが制作に含まれないかという、業務的には重なっている部分もありますので、もちろん、企画という仕事がないわけではないですから、入れることに対してネガティブではないですけれども、どちらが適切かと言われると難しいですね。

会長（能祖構成員）

楫屋さんも企画者ではないですか。

（楫屋構成員）

一般的には制作の中にそれも入っているものなので、それでよいと思います。

会長（能祖構成員）

わかりました。私も企画者なものですから。

そうすると、これに関連して、例えば、6ページの最後の、「教育内容としての四つのまとまりを、企画・制作の理論から実践までを経験できるような」というところも、「企画」は取って「制作」になるということですか。

（事務局）

いまおっしゃっていただいたところは、よく見ると少し言葉足らずのところもありまして、8ページを見ていただきますと、①から④にまとめる前段の一番上で、「演技、舞台技術、企画・制作等の理論から実践までを通じた」となっていますから、演技も含めて、行う教育の中身を全部ここに網羅して入れて、その理論から実践までを経験できるまとまりとして整備するという文言にします。申し訳ございません。

会長（能祖構成員）

他にいかがですか。

それでは、今日、事務局にお預けした部分もあるので、事務局の方からメールでいただいて、またお目通しいたいて、御意見をいただければと思います。いただいた御意見等を踏まえ、報告書案の文言を調整したいと思います。皆さまに集まっていたのは今回が最後になりますので、ここからの文言調整は、私に一任していただいて、私と川端会長代理と事務局とで整理します。その上で、皆様にメール等で確認していただき、確定して、私から教育長に提出することとしてよいでしょうか。

(賛成の声)

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。

それでは、最後ですので、お一人ずつ感想を述べていただいてもよろしいでしょうか。荒木さんからお願いします。

(荒木構成員)

だんだん像がはっきりしてきて、いよいよこういった学科ができるのだなという実感が湧いてきたところなのですけれど、作るからには、生徒たちにとって良いものということで、この報告書に近づけるように、あまり妥協せずに、要望するところは要望していただければと思います。私自身は力になれませんでしたけれど、どうもありがとうございました。

(岡野構成員)

4月からでしたけれども、最初に聞いたときは、どういうものができるのかイメージができませんでした。有識者の方々の色々な御発言から勉強させていただいて、本当にありがとうございました。

(楫屋構成員)

高校の舞台芸術科というのは、前例があるので、そんなにびっくりはしないのだけれど、神奈川のように舞台芸術が盛んなところではできるといえることは、全国的にも注目されることは間違いないので、現場は大変だと思うのと同時に、別の次元ですが、ずっと議論している、国立大学に演劇科がないということが、全ての議論の始まりのところなので、これは、別のところで、繰り返し議論していく問題だと、そういうことも、また改めて思いました。

(久我構成員)

6回に渡って色々御意見をいただきましてありがとうございました。これで、ほぼ骨格が見えたところになると思います。ここから、今度は教育委員会と学校と一緒に、具体的な学校づくりに入ると、これからますます大変になるかと思うので、責任を痛感しているところなのですけれど、そういう意味で、今まで専門家の皆さんから色々アドバイスをいただいておりますので、これから、そのつながりの中で、何か御意見やアドバイスをいただければありがたいと思っております。

(近藤構成員)

我々は演劇を^{なりわい}生業としている企業ではありますけれども、教育現場ということに関しては素人でしたので、なかなか発言しにくい部分もありましたけれど、勉強にもなりました。我々は劇団として、演劇の市民社会への復権を一つの理念に挙げて活動し

ています。こういった学校ができることによって、エンターテインメントの世界におけるライブパフォーマンスの多様化が進む中で、舞台芸術というものが、社会にしっかり意味のあるものとして存在し続けるということは大切だと思いますし、それを通して学べるものが非常にたくさんあると確信しておりますので、ぜひこういった学校がしっかりとした形になって、こういったところで学んだ人たちが、将来的にプロの俳優やスタッフになっていってくれるような社会ができるよう、強く期待しています。

(川端構成員)

本当に多くのことを学ばせていただき、ありがとうございます。今後、必要かなと思うのは、やはり中学校の先生方にしっかりとコンセプトを伝えていくことが非常に大事だと思っています。やはり、いまの生徒たちの中で、芸能界に入ること、それが悪いというわけではないのですが、表面的なことと、いまここで話されている舞台芸術というものを取り違えてしまう生徒が出てくると、大変なことが起こってしまうのではないかという一抹の不安もあります。そこを解消しながら、まず多くの中学生、高校生に舞台を見てもらうというところからスタートできたらよいなと思っています。これからは、やはりエネルギーを注がないといけないと思います。

会長（能祖構成員）

私もたくさん勉強させていただきました。いま骨格というふうにおっしゃいましたが、たしかに、大事な骨格づくりを皆さんと一緒にさせていただいたということと、この骨格の中には、かなり夢を注入していると思うので、これが、空虚な夢にならないような、ここから、筋肉をつけ、内臓をつくり、そして、きちんと生徒たちの身になる、そのようなものになってほしい、ぜひそういう高校として実現させていただきたいというふうに思います。どうもありがとうございました。